

地域情報（県別）

【秋田】「病院っぽくない」英国ホテル調クリニックに評価の声-熊谷真史・くまがい診療所院長に聞く◆Vol.1

英国住宅の建築家と出会い実現「受診ハードル下げたい」

2025年1月31日（金）配信 m3.com地域版

ベージュと白を基調にした外観に、特注家具で作られた受付カウンター、シックな待合室……。医療機関には珍しい英国ホテル調のクリニックが秋田県大館市にある。2023年3月に開院した「くまがい診療所」の院長を務めるのは、同市で中学・高校生時代を過ごした熊谷真史氏だ。「第一に、病院っぽくない雰囲気にしたかった」と話す熊谷氏の言葉の裏には、医療受診のハードルを低くしたい思いがある。開業までの経緯とクリニックづくりの思いを聞いた。（2024年12月21日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら



熊谷真史氏（クリニック提供）

海外大を経て阪大医学部入学、勤務医として大館市へ戻る

——熊谷院長は米国アイオワ大学を卒業後に大阪大学医学部に入学し、2007年に卒業しました。まずは、医師を志した経緯をお聞かせください。

海外の大学に通ううちに医師である父を思うようになり、「自分もこの道に」と考えるようになりました。

私の生まれは兵庫県西宮市で、父は兵庫県内で勤務医を務めていました。子どもながらに父の仕事の大変さは伝わってきたので、医師になりたい気持ちはありませんでした。それよりも、子どものころから異国への憧れを強く抱いており、「人生で一度は海外を見てみたい」と思っていたことからアイオワ大学に入学。そこでは言語文化学や教育学を学び、日本語教師の資格も取得しました。

医師を志した経緯に大きなきっかけや転機があったわけではありません。アメリカで大学生活を送るうちに、ふと「日本に帰って父のあとを継ごうか」と思い、その気持ちが強くなっていったんです。

私の家族は中学生のころに秋田県に引っ越し、父は地元の鹿角市で介護事業を立ち上げ、その法人は介護老人保健施設「いこいの里」を運営しています。このクリニック、くまがい診療所のある大館市に引っ越したのは中学3年のころで、私が通っていた高校も同市内にある県立大館鳳鳴高校です。

——勤務医時代にはどんなキャリアを送り、開業に至ったのでしょうか。

大阪大学卒業後は青森県弘前市の健生病院で研修を受け、同院を含めて青森の病院に5年ほど勤めました。その後、地元の秋田に戻って大館市の秋田労災病院に10年ほど勤務。青森時代は主に循環器内科の診療を行っていましたが、秋田労災病院では医師がさほど多くないこともあり、幅広く患者さんを診るようになりました。同院では現在も週に1回、非常勤として勤務を続けています。

そんななかで開業を決めたのは、「自分のできることを自分の好きな形で提供したい」と思うようになったためです。勤務医は診療に集中できるのが魅力である一方、どうしても環境や条件には制限があります。勤務医として15年ほどのキャリアを重ねたので、残りの医師人生は経営にも挑戦し、自分の好きな医療サービスを試したい思いがありました。



くまがい診療所の外観（クリニック提供）

「英国調」の希望を具現化させるプロと出会い、開業へ

——クリニックのホームページを見ると、外観や内装が英国ホテルのようでとても印象的です。なぜこうした装いにしたのですか。

病院っぽくない、患者さんが入りやすい雰囲気にしたかったためですね。時代の変化に伴い、病院やクリニックも患者さん目線を意識したところは増えていると思いますが、それでも地方ではまだ医療機関に暗いイメージを持つ人は少なくないでしょう。雰囲気が良くて、「あそこなら行ってもいいかな」と思ってもらえるにはどうすればいいだろう——。当院の事務長・保健師を務める妻と話し合うなか、たまたま知人を通じて英国建築を専門とする設計事務所「コッツワールド」（東京都）社長の小尾光一さんと出会いました。

私と妻にはもともと、大まかなイメージがありました。「現代建築ではなく、歴史を感じさせる雰囲気を出したい」「待合室はイギリスのホテルのロビーのようにしたい」。建築家の小尾さんは英国住宅を造り続けて20年以上になるベテランです。私たちがこういった希望を伝えるとそれをうまく汲んでくれて、デザイン案は最初に提案された時点でとても良いものでした。



特注家具で作られた受付カウンター（クリニック提供）

——工夫を凝らしたクリニックの完成までには、時間とお金もかかったのではないのでしょうか。

小尾さんと打ち合わせるようになってから竣工まで1年ほどかかったと思います。当時はコロナ禍を受けて木材の価格が高騰した状況、いわゆるウッドショックの影響があり、一度デザイン案が白紙に戻ったんですね。

費用的には、同規模のクリニックと大差はないのではないのでしょうか。他のクリニックの事例を詳しく知らないのが厳密には分かりませんが、なるべくコストを抑えつつ良い雰囲気を保てるよう、小尾さんに工夫していただきました。デザイン面で相応に費用はかかっているものの、素材の調整など小さなコストカットを積み重ねることにより、当初の予算内で済みました。



シックな雰囲気の待合室（クリニック提供）

「病院っぽくない」「雰囲気がいい」と患者さんからも

——クリニックが出来上がったときの印象をどう感じましたか。

入口から特注家具で造られた受付カウンター、シックなデザインの椅子が並ぶ待合室に至る雰囲気はとても気に入っており、出来上がりを見たときは「すごい」と自賛しました（笑）。というのも、院内の間取りはほぼ全て自分で考えたものなんです。広々としているうえ、待合室と診療エリアがきちんと分けられており、個室の相談室を備えてプライバシーが保たれる工夫もしています。空間設計はうまくできたように感じました。

——患者さんからもクリニックの外観・内観に関連した感想をいただけそうですね。

「病院っぽくないですね」と、私が意図していた言葉をかけていただけるのはうれしいです。開院して1年9カ月が経ちますが、いまだに初診の患者さんからは同様のことを言われるので、ファーストインプレッションの点でうまくいっているのではないのでしょうか。「外国っぽくて雰囲気がいい」「きれい」など、デザイン面を評価していただけるのはありがたいです。

こんなふうに当院が病院らしくない、入りやすいクリニックを目指しているのは「働く人たちへの医療」をテーマに掲げているため。先ほどお話しした「自分のできることを好きな形で提供したい」というのは、このテーマの実現を意味しています。

◆熊谷 真史（くまがい・まさふみ）氏

1999年米国アイオワ大学卒、2007年大阪大学医学部卒。青森県の健生病院で研修を受け、同県の病院に勤務した後、地元の秋田県に戻り秋田労災病院に勤務。2023年くまがい診療所を開院。「働く人たちへの医療」を掲げ、地域住民向けに自院で健康イベントも開催する。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

